

Improvisation Practice

では、Improvisation Practice、始めていきましょう。

こちらのテキストでは、アドリブフレーズを作る為の基本を学んでいきます。

もう1つの Improvisation Basic の方でも大元を解説していますが、もう少し「具体的にどういうことをやっていくか？」と言う部分を見ていきましょう。

まず、用意したバックグトラックは以下の3種類です。

- ・ Track01、key=C、I - IV(C - F)roop

Musical notation for Track01, key=C, I-IV(C-F)roop. The staff shows a 4/4 time signature with measures 1 and 2 marked with a C chord, and measures 3 and 4 marked with an F chord. The TAB staff below shows slash marks for each measure.

- ・ Track02、key=C、I - VI - II - V(C - Am - Dm - G)roop

Musical notation for Track02, key=C, I-VI-II-V(C-Am-Dm-G)roop. The staff shows a 4/4 time signature with measures 5, 6, 7, and 8 marked with C, Am, Dm, and G chords respectively. The TAB staff below shows slash marks for each measure.

- ・ Track03、key=C、V 7(G7)一発(※実際は G7sus4⇔G7 に近い動きをしています)

Musical notation for Track03, key=C, V 7(G7)一発(※実際は G7sus4⇔G7 に近い動きをしています). The staff shows a 4/4 time signature with measures 9, 10, 11, and 12 marked with a G7 chord. The TAB staff below shows slash marks for each measure.

これらをテンポ違いで2つずつ用意したので、計6つですね。

僕が用意したものの他にも、youtube で検索すると、色々な楽曲のバックグトラックが

出てきます。

後はフリーの音楽プレーヤーも web 上に落ちているので、それを使ってテンポやピッチを変えれば様々な状況が作れますね。

DTM 環境がある人は、トラックを自分で作ってみても良いでしょう。

では、実際の練習に入ります。

■アイデア 1、短いフレーズを作ってみる

これは見ての通りですね。まずは短めのフレーズを作ってみよう、と言う事です。

基準はいくつかあって、「一定の拍数か、一定の小節数に収めてみよう」と考えると練習がしやすいかもしれません。

拍数は、さすがに 1 拍は短すぎるので、普通は 2~4 拍間で完結する様にイメージすることになるでしょう。

4 拍に収まるフレーズであれば、実質、1 小節間で考えるのとほぼ同じですね。

ちなみに、テンポが一定以上の速さの場合は、少ない拍数内でのフレーズは作りにくくなります(※時間的に短すぎるので)

小節数で考える場合も同じで、こちらの方も、2 小節間にまたがるフレーズ、3 小節間、4 小節間と色々考えてみましょう。

実際の所、3 小節間の場合は 4 小節目が休符になるパターンもあるはずなので、結局どちらも同じ、と考えても良いでしょう。

他の組み合わせとしては、3 小節+1 小節(もしくは逆)で 2 種類のメロディーを弾くのもアリでしょう。(※もちろん 2 小節+2 小節なども可)

この辺り、色々なパターンを自分なりに出してみてください。

次の譜例は、1 つ 1 つのフレーズを短めにまとめてみたものです。

・アイデア 1、参考譜例 1、(Track01、サンプルフレーズ)

大方、2拍ほどで1つのフレーズが完結していますね。

これは次のアイディアとして解説しますが、フレーズのアタマ(強拍の部分)の手前にも導入の為のメロディーが入っています。

これらは両者合わせてフレーズの一部と見るのですが、どちらかと言えば右側の四角の部分を中心の様にみます。(※鳴らしたい目的の音、の様に捉えた方が良いでしょう)

こう言った、強拍の前の弱拍からフレーズが始まる事をアウフタクト(弱起)と呼び、この様にフレーズを作ると自然な導入感が生まれますね。(※アウフタクトについては【教科書 vol.67】でも解説しています)

もちろん、次の様に普通に強拍からフレーズを始めても構いません。

・アイディア1、参考譜例2、(Track01、サンプルフレーズ)

この様に、普通に演奏しているのであれば、大方の場合、強起的なものと弱起的なものが混ざってきますね。(※1、3小節目のフレーズスタートが強起、2、4小節目は弱起的な感じです。2小節目は1小節目の続きでもありますが)

では、少し次の要素が混じりましたが、アイディア1としてはこんな感じです。

■アイディア2、アウフタクトを意識してみる

さて、今説明したように、アウフタクトを意識すると、強拍でドン！とフレーズを始めるよりも導入感や流れのあるフレーズが作れます(演出できます)。

そもそも、1小節内の1拍目を一番強い(強く感じる)とすると、残りの3拍は相対的には弱拍ですね。

一応、1小節内の4拍については以下の様な分類で説明されることが多いです。

A musical staff showing a 4/4 measure with four quarter notes. Below the staff, the dynamics are labeled: 強 (strong) for the first beat, 弱 (weak) for the second, 中強 (medium strong) for the third, and 弱 (weak) for the fourth. The staff is labeled 'TAB' on the left.

(※4/4 拍子の場合)

3拍目の「中強」は、2、4拍目に比べたら少し強いという感じに捉えて、余程デリケートに音楽を構築するのでもなければ、ほぼ、弱拍的に扱っても問題ないでしょう。

なので要するに、アウフタクト的なフレーズを弾く場合は、下の様な位置からスタートしたらいいわけですね。

A musical staff showing a 4/4 measure with four quarter notes. Red boxes highlight the first and third beats, and red circles highlight the first notes of the second and fourth beats. Red arrows point from the first beat to the second and from the third to the fourth. The staff is labeled 'TAB' on the left.

・アイディア2、参考譜例1、(Track01、サンプルフレーズ)

A musical staff showing a sample phrase with guitar tablature. The staff is labeled 'TAB' on the left. The tablature shows fret numbers: 14, 13, 15, 13, 14, 13, 15, 15, 15, 15, 15, (15), 13, 15, 13, 14, 13, (13). Dynamic markings 'full' and 'full full' are placed above the staff. Chord symbols 'C' and 'F' are also present. The staff is labeled 'TAB' on the left.

この譜例は先ほどのアイディア1の様に、短いフレーズでまとまっていますね。

ですが逆に、以下の様にアウフタクトを長く取ることも可能です。

・アイディア2、参考譜例2、(Track01、サンプルフレーズ)

これらの譜例は少し極端に作ってありますが、実力のあるプレイヤーの演奏をコピーしてみると、いかにアウフタクト的なスタートをしているフレーズが多いか？に気が付くでしょう。

ただ、この辺りについては、(強拍から始めるよりも)アウフタクトの方が良いと言うわけでは無く、狙っている表現によって選ぶ感じですね。

弱拍から始まるフレーズは、ある種の流麗さを感じるのに対し、強拍から始まるフレーズは、実直さや素直さ、シンプルな勢いなどが生まれやすいです。(※これはダイナミクスや使う音域など、他の要素にも影響されますが)

・アイディア3、特定の狙った音に向かうフレーズ、高音 or 低音

では、3つめですが、タイトルにもある様に「フレーズの最後の音を先に決めてからフレーズを作ってみよう」と言うものです。

狙う音はどこでも良いのですが、まずは分かりやすく、高めの音と低めの音の極端に振ってみたいと思います。

ここでは、1弦15フレットのG音と、4弦5フレットのG音に設定してみましようか。

フレーズのスタートから、狙った音までの展開にも工夫の余地はありますが、まずは素直に目標の音へ無事辿り着くフレーズを作ってみて下さい。

ちなみに、パターンを大雑把に分類すると、

- 1、目標の音まで音を詰め込む(ある程度途切れず弾き続ける)
- 2、フレーズを(その範囲内で)複数に分ける

の2パターンになるでしょう。

・アイデア3、参考譜例1、高音(G音)目標 (Track02、サンプルフレーズ)

28 29 30

C Am

TAB 9-10-12 | 9-12-10-9 | 9-10-9 12-10 | 12-14-10 | 10-12-9

31 32

Dm G

TAB 10-9-10-12 | 9-10-12 | 10-12-10-12-13-15-13-15 | 12 | 13-17-15

・アイデア3、参考譜例2、低音(G音)目標 (Track02、サンプルフレーズ)

5 6 7

C Am

TAB 12-15-13-12 | 15 | 15-13 | 15 | 12-13-12 | 14 | 12 | 14-12-10-10-12-14 | 9-7-7

8 9

Dm G

TAB 7-5 | 7-5 | 7-5 | 7-5 | 7-5 | 7-5 | 7-5 | 5-7 | 5-7 | 7 | 7 | 8 | 7 | 7 | 5 | 7-5

譜例では、低音部から高音部へ、高音部から低音部へと広めに展開させましたが、実際はどのあたりの音程から始めても構いません。(※後、狙った音を必ずしも4小節目に持って来なくても良いです。鳴らす場所は自由に決めて下さい)

最後に、これは発展形になりますが、実際にアドリブをやっている最中には、フレーズの展開を演奏しながら決めていくわけですね。(※意識的かどうかはともかく)

それは要するに、フレーズ(音)の向かう先や構成を大まかなイメージとして作り上げているわけなので、それが瞬時に出来るかどうか？にこの練習は繋がってきます。

今回は、狙う場所が高音と低音と言う極端な例でしたが、着地点はどこでも良いので色々な場所でやってみましょう。

・アイデア4、譜割りの工夫と、シンコペーションを使ったフレーズ

最後の4つ目は、「譜割りとシンコペーションの工夫」なので、リズム面からのアプローチですね。

これも【教科書】の後半の方で色々やっていますが、もう少し具体例を挙げてみましょうか。

まず、基本的な譜割りについてですが、4分音符、8分音符はそこまで組み合わせが多くはありませんね。(※と言いつつも、作ろうと思えばそれなりに作れますが)

なので16分音符で見てください。組み合わせとしてはこんな感じです。

※16分音符の各組み合わせ事例(1拍内、音4つ分のパターン)

The image displays musical notation for guitar, specifically focusing on 16th-note patterns within a one-beat, four-note framework. It is organized into two systems, each containing two measures. The first system begins at measure 14 and concludes at measure 15. The second system starts at measure 16 and ends at measure 17. Each measure is represented by a treble clef staff with notes and rests, and a corresponding guitar TAB staff with 'x' marks indicating fretted notes. The first measure of each system features a continuous sequence of 16th notes. The second measure of each system shows a pattern with rests and accents, illustrating the use of syncopation.

それぞれ1拍内、16分音符4つ分の範囲でのパターンはこうなりますね。

これらを組み合わせるだけでも、リズム面での工夫は沢山出来ますが、さらにシンコペーションを加えると、どんどんフレーズを高度にできます。(※その時、高度なものを弾くべきかどうかはともかく)

※16分音符とシンコペーションの組み合わせ事例

極端な例としてはこんな感じですね。

これらの要素を意識してフレーズを作ってみよう、というアイデアです。

それでは実際の譜例ですが、次はバックングにドミナント7th一発(G7)のTrack03を使ってみましょうか。

こう言った状況の場合、マイナーペンタを使う事も多いのですが、それだとロック的なフレーズが出て来やすいので、少し趣向を変えてGミクソリディアン(=Cメジャースケール)をメインに考えてみます。(※もちろんマイナーペンタでも可)

先ほどまでの譜例よりも、少しリズムに趣向を凝らしてみましょう。

・アイデア4、参考譜例1 (Track03、サンプルフレーズ)

・アイデア4、参考譜例2 (Track03、サンプルフレーズ)

(※次ページに続きます)

The image shows a musical score for guitar. The top staff is a treble clef with a G7 chord indicated above it. The melody starts at measure 26 with a series of eighth notes, followed by a quarter note and a half note. The bottom staff is a TAB with fret numbers: (12) 13 12 12 10 12 12 12 10 10 12 10 12. There are two 3/4 note rhythms indicated above the TAB in the second measure.

アイデア3までのフレーズは横に流れる様なものが多かったのですが、こちらは縦の動きを強く感じますね。(※バックがファンク系なのもありますが)

この様に休符やスタッカートを意識すると、リズムの縦のラインが見える様な傾向になります。

シンコペーションは、通常、強拍(相対的に強く感じる)になる位置からアタックがズれるので、リズムの変化を生みだせますね。

例えば自分の弾くフレーズがマンネリ化してきた時に、譜割りをガラッと変えてみるなどすると、新しいアイデアが湧いてくるでしょう。

と言う事で、【Improvisation Practice】メインテキストは以上になります。

フレーズ作りの実戦と言う事で、主にテクニカルな観点からの解説となりましたが、役に立ててもらえたら嬉しく思います。

このテキストの他にも、【教科書】や【Improvisation Basic】の内容とも合わせて、アドリブフレーズを考えてみて下さい。

後、気が付いている人もいるかと思いますが、これらの手法や観点は作曲にも活かすことが可能です。

結局のところ、音楽の3大要素と言われる、メロディー、リズム、ハーモニーの組み合わせの話ですからね。

全ては繋がっている、と言う感覚を忘れずに、色々な視点から音楽を見ることが出来るようになるのが大事ですね。

それでは、また別の講座でお会いしましょう。

ありがとうございました。

大沼